熊本大学教育学部紀要
第71号, 83－91, 2022

# 多様性から学びかかわりを楽しむコミュニティスペースの開始と展開

本吉　大介・隈部　祐香

# Starting up a community space where we can learn from diversity and enjoy relationships

Daisuke Motoyoshi, Yuka Kumabe

（Received October 1, 2022）

**Keywords:** lifelong learning, diversity, relationship, facilitator

## Ⅰ．問題と目的

### 1. 生涯学習推進の背景・意義

障害者の生涯学習に関しては，2006 年の国連総会において「障害者の権利に関する条約」が採択され，我が国でも 2014 年の批准に向け，国内法整備が行われてきた．障害者権利条約第 24 条には，「障害者を包容するあらゆる段階の教育制度及び生涯学習を確保する」ことが明記され，文部科学省においても，障害者の生涯を通じた多様な学習活動を支援するための取り組みが行われている．

主な取り組みとして，2016 年 12 月 14 日には，「文部科学省が所管する分野における障害者施策の意識改革と抜本的な拡充～学校教育政策から「生涯学習」政策へ～」を公表し，従来の学校教育政策を中心とする障害者政策に留まらず，生涯学習を通じた生き甲斐づくり，地域との繋がりづくりを推進し，「障害者の自己実現を目指す生涯学習政策」を総合的に展開していくとの方針を明らかにした．その後，2017 年 4 月に文部科学省の生涯学習政策局生涯学習推進課に障害者学習支援推進室が設置され，具体的な施策が推進されてきた（井口，2020）．

2019 年 3 月には，「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」が行われ，「障害者の生涯学習の推進方策について（報告）」をまとめている．そこでは，「各ライフステージにおいて求められる学び」の推進が提起され，多様な実施主体による多様な学びの機会提供の促進が示されている他，学校卒業後の組織的な継続教育の検討として，「障害福祉サービスと連携した学びの場づくり」や「大学における知的障害者等の学びの場づくり」に関する研究の促進が示されている．

ここで障害のある人の実態を見ると，「令和元年度学校基本調査」より，特別支援学校高等部卒業者の 8 割強を占める知的障害のある生徒の進路先において，進学の割合はわずか約 0.4％に留まっている．学びは，すべての人々にとって，学校を卒業した後も，あらゆるライフステージでの夢や希望を支える役割を担っているものである．そのため，障害のある生徒の学校を卒業した後の学びの場をいかに充実させるかが重要である．

### 2. 求められている生涯学習

生涯の各ライフステージにおいて生じる様々な課題や障害者本人の困り事の解決に向けた学習の場や，地域で仲間と過ごせる交流の場，職業的な学びを行うリカレント教育の機会が求められている（文部科学省，2019）．

実際に求められている生涯学習については，「成長する（45.8％）」，「暮らしの中で生じる課題の解決を図る（39.4％）」，「健康の維持・増進（38.0％）」を目的としている人が多く，仕事における課題の解決といった目的も高い割合となっている（文部科学省，2018a）．

特に，仕事における課題について，栗林・野﨑・和田（2018）によると，障害者が社会生活を送る上で様々な課題に直面し，一旦就職しても職場になじめず早期に生活面での困難を抱えている人の割合が 5 割を超えていることが明らかとなっている．

以上のことから，生涯の各ライフステージを通じて，仲間と共に新しいことを学ぶ場や，仕事や普段の生活に関することなど，暮らしの中で生じる疑問や悩みを早期に解決する学びの場づくりを推進する必要がある．

**3. 生涯学習における現状と課題**

しかし現状として，学校卒業後の学びの場やプログラムが身近に“ある”と感じている人の割合は3割程度であり，障害者の生涯学習の推進に向けた学びの場づくりが急務となっている（文部科学省，2018a）．このことは，2017年4月に発表された「特別支援教育の生涯学習化に向けて」と題する大臣メッセージからも読み取ることができ，学びの場づくりは，本人だけでなく保護者のニーズとしても挙げられている．

これを踏まえ，文部科学省は2018年度から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を実施し，これまでに各地で多様な実践研究事業を展開している．しかし，取り組みの多くは民間団体が担っており，公民館等の社会教育施設における取り組みや，大学等の取り組みは低調な状況にある（文部科学省；2018b，2017）．すなわち，休日等に地域での学習活動に参加する機会や選択肢が少ない状況にあると言える．

加えて，生涯学習に関する課題として，「一緒に学習する友人，仲間がいない（71.7%）」，「学習費用を支払う余裕がない（71.5%）」，「学ぼうとする障害者に対する社会の理解がない（66.3%）」といった課題が存在している（文部科学省，2018）．筆者はここに，多様な人が集い，障害について学ぶ学生の参加が見込める「大学」における学びの場づくりの可能性を見出した．

**4. 地域における学びの場の実態**

熊本には，障害者の学びの場に関する情報が限られ，少ないことの課題がある．障害者の学びの場として設けられている施設Xの学習講座の内容を見ると，「絵画」や「陶芸」，「編み物」など，余暇を充実させるための学習が多く，課題の解決を図るための講座は見受けられなかった．さらに，学びが当事者，Xの講師，当事者会の仲間など限られた人間関係の中で行われていることが多く，多様な人との関わりが少ないという現状もあると捉えた．

以上の実態から，地域の学びの場においては，生活上の困り感が解消できるような活動，多様な人と関わる活動を充実させる必要があると考えた．

**5. 本研究の目的**

以上の経緯から，本研究では，障害のある人の生涯学習の一環として，多様な人間関係の中で共に学び，交流する場をつくる実践を行い，活動を継続させていくために効果的なことや課題を明らかにすること，また，今後，他の地域・機関において障害のある人の学びの場をつくる際の一助となることを目的とした．

## Ⅱ．方法

**1. 活動の概要**

筆者らは，上記の目的を達成するため，『熊とフレンズ』と称し，活動の場をつくる試みを始めた．当初は，地域の商店街の一角にあるレンタルスペースにて開催する予定であったが，新型コロナウイルスの感染拡大を受け，オンラインでの活動とした．

2週間に1回ずつ，土曜日の14:30～16:30に実施し，#1（6/26）～#14（3/12）まで実施した．

**2. 本研究で示すデータ**

活動の記録（参加者の様子，ファシリテーターと参加者の関わりなど毎回A4用紙1枚程度），毎回の活動後に実施したアンケート（満足度や希望，感想など）の結果を本稿では示す．

**3. 時期**

X年6月～X年12月（#1～#11）について，本稿では創設期（#1～#7）と試行期（#8～#11）に区分して示す．

**4. 場の構造**

学内で学生のサポーター及び参加者を募集し，各回に7名～20名程度の学生が参加した．Zoomのブレイクアウトルームを用い，全体をメインセッション，部屋に分かれる場をブレイクアウトセッションとし，活動の中で2つの場を行き来する形をとった（Figure 1）．そして，ここでは，学外から参加している障害のある人を“参加者”，学生の中で「場を動かす」「まとめる」役割をもつ“ファシリテーター”，その他を“学生参加者”に分けて捉えた．

**5. 想定した学習内容**

ブレイクアウトルームとして，「趣味の部屋」，「悩み相談の部屋」，「雑談の部屋」をつくり，色々な人と話す，課題を解決する，溜まった気持ちを発散するといったことを目的とした．

その際，途中で2～3度メンバーを入れ替え，多様な考えから学べるようにしたいと考えた．また，この活動では「気持ちに寄り添う，一緒に考える，提案す

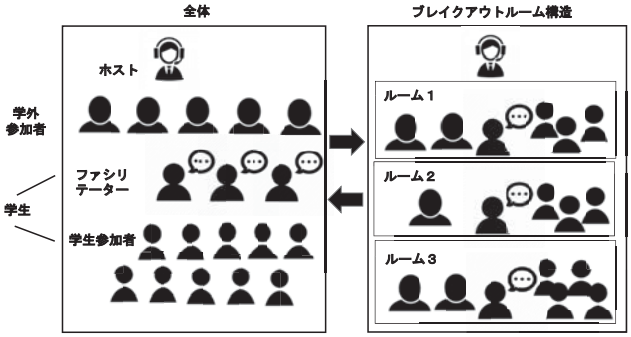


Figure 1　場の構造

る」「雑談から悩み相談への移行など柔軟に対応する」「参加者の課題や希望に合わせ，ファシリテーターを配置する」といったことを大切にして取り組んだ．

## Ⅲ．活動の経過

### 1．コミュニティスペースの創設期 #1 ～ #7（X 年 6 月～ 10 月）

#### （1）開始にあたって行ったこと

①パンフレットの作成

参加者に活動の主旨などを伝えるためのパンフレットを作成した．主な内容は以下の通りである．

【活動内容・目的】

・日常のちょっとしたことでも，何でも話せるくつろぎの空間です．
・気持ちを分かち合おう．
・悩みを語り合おう．
・困っていることはないですか？みんなで共有して解決しよう．
・雑談やゲームを楽しもう．

②アンケート（Google form）の作成

活動の満足度について調査するアンケートを作成した．項目は以下の通りである．

1）居心地が良かった．
2）また来たいと思った．
3）悩みが解決した．
4）要望
5）感想

1）～3）はとても・少し・あまり・全然の 4 段階評価．

③参加者の募集

はじめに，研究室の学生から参加者を募り 8 名程度で活動を開始した．#6 からは他の学生の参加を募ることとした．その際，活動を大学のカリキュラムと関連づけることで，特別支援を学ぶ学生の継続的な参加につながるようにした．

#### （2）障害のある人の参加

既に関係があった障害のある人，その家族への紹介から参加につながった．創設期における参加者を Table 1 に示した．

Table 1　熊とフレンズの参加者と参加状況

| 参加者 | 年齢 | 障害の程度 | 参加状況 #1 | #2 | #3 | #4 | #5 | #6 | #7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 58 | 肢体不自由 | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ |
| B | 27 | 知的障害（中度），肢体不自由 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| C | 22 | ADHD | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × |
| D | 27 | 肢体不自由 | ○ | ○ | ○ | × | × | × | × |
| E | 19 | 自閉スペクトラム症 | ○ | ○ | × | × | ○ | ○ | × |
| F | 41 | 知的障害（軽度） | － | － | － | － | － | － | ○ |

#### （3）創設期における活動内容・話題，満足度

活動内容・話題と満足度をまとめたものを Table 2 に示した．満足度については，4 段階評価の「とても」「少し」を合わせて表示している．これまでになされた悩み相談については，#3 の「D: 人間関係についての相談」，#4 の「B:SNS のやりとりについての相談」，「C: 資格試験のための勉強法を知りたい」，#6 の「E:E メールが多くて整理できない」，#7 の「B: 恋についての気持ちを共有する」があった．満足度についてみると，「居心地が良い」は上昇傾向，「また来たい」は全てにおいて 100%，「悩みが解決した」は変動が見られた．

#### （4）創設期における要望，課題，検討事項

要望，課題，検討事項をまとめたものを Table 3 に示した．主な検討事項は 2 点であった．

1 点目に，A「慣れてないから話し出すタイミングがつかめなかった」という感想を受け，参加者に発言を促すファシリテートの大切さを感じ，グループの中でファシリテーターを事前に定めることにした．

2 点目に，B「最初の部屋から違う部屋に行きにくい」という感想を受け，基本となる時間設定と休憩時間の確保を検討した．

Table 2　創設期における活動内容・話題，満足度

| | 活動内容・話題 | 満足度（「とても」「少し」） | |
|---|---|---|---|
| #1<br>6 月 26 日<br>回収率 100% | ゲーム（以心伝心クイズ，超接写クイズ），<br>雑談 | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 80%<br>100%<br>60% |
| #2<br>7 月 10 日<br>回収率 80% | 「趣味」好きなアイドル，ドラマ，楽器等<br>「雑談」思い出話を楽しむ | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 80%<br>100%<br>100% |
| #3<br>7 月 24 日<br>回収率 100% | 「悩み相談」D：人間関係についての悩み相談<br>「雑談」最近の過ごし方について | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 66.7%<br>100%<br>66.7% |
| #4<br>9 月 11 日<br>回収率 100% | 「悩み相談」B：SNS のやりとりについて相談<br>C：資格試験のための勉強法を知りたい<br>「雑談」最近の過ごし方について | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 100%<br>100%<br>66.7% |
| #5<br>9 月 25 日<br>回収率 100% | 「悩み相談」B：SNS のやりとりについて相談<br>「雑談」最近の過ごし方について | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 100%<br>100%<br>100% |
| #6<br>10 月 9 日<br>回収率 75% | 「悩み相談」E：メールの通知が多く整理できない<br>「雑談」家計簿アプリについて | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 100%<br>100%<br>100% |
| #7<br>10 月 23 日<br>回収率 66.7% | 「雑談」A：好きなアイスについて<br>B：恋についての気持ちを共有する<br>「知りたい」F：地元の都道府県の紹介 | 居心地が良い<br>また来たい<br>悩みが解決した | 100%<br>100%<br>50% |

Table 3　創設期における要望，課題，検討事項

| | 要望 | 課題 | 検討事項 |
|---|---|---|---|
| #1<br>6月26日 | B「お話する場面が増えたらいいと思った」<br>E「皆さんの趣味や興味のあることについてもっと詳しくお話聞いたりしたかった」<br>A「自分から話すタイミングが難しかった」<br>「今日の主な話題など事前に分かるとよい」 | ・障害の種類が多様なため，できるゲームが限られる。<br>・zoomへ個人参加だと名前が出ているが，複数参加の場合は名前の表示がなく，名前を呼びづらい。 | ・名札プレートの検討 |
| #2<br>7月10日 | B「お部屋でもっとみんなと一緒に話ができたらいい」<br>E「ルーム選択が自分で自由にできたらと思いました」<br>A「慣れてないから話し出すタイミングが掴めなかった」 | ・ルーム選択を参加者が自由にできるようにすると，スタッフと参加者が偏る可能性がある。<br>・参加者に話を振るファシリテート能力が求められる。 | ・グループの中でファシリテート役のスタッフを事前に決める。 |
| #3<br>7月24日 | B「もう少しお話のやりとりができる機会があるといい」<br>C「学生さんなどの話せる人を増やしてほしい」 | ・参加者の興味・関心に応じた話題の提供が必要である。<br>・学生スタッフの確保 | ・臨床活動として設定することで学生の確保をはかる。 |
| #4<br>9月10日 | B「今日は以前よりも話すことができたが，もっと聞いてもらったり話がしたい」<br>C「グループをもっと少人数にしてもいい（3人など）」 | ・話したいことを事前に調査する事前アンケートの検討<br>・参加者に対し，スタッフの人数が多い印象<br>・グループ分けの調整（事前にすべてを把握できない。） | ・可能な限り事前にグループ分けを考える。 |
| #5<br>9月25日 | B「もっと○○さんの話が聞けたらいい」<br>「最初の部屋から違う部屋に行きにくい」<br>E「グループラインがあればいい」 | ・グループで話す時間が長い。<br>・新たな参加者の拡大<br>・話す話題が少なくなっている。 | ・時間設定と休憩時間の確保<br>・地域活動支援センターに活動を紹介する。<br>・サイコロ等にテーマを書き，話題提供に用いる。 |
| #6<br>10月9日 | C「人数が多すぎるとしんどい」<br>「事前リクエストでこの人と話が出来たらみたいな希望もかなえてもらえれば幸いです」 | ・リクエストされたスタッフが必ず参加できるとは限らない。<br>・スタッフのファシリテート能力を活かせていない。<br>・参加者の希望・ニーズが十分にみたされていない。 | ・希望があれば「その他」欄に書いてもらう。<br>・得意なことをアンケートで明らかにする。<br>・事前アンケートでどんなことをしたいか聞く。 |
| #7<br>10月23日 | B「もっと○○さんと話をしたい」<br>「楽しそうにお話しているので聞いていますが，分からない時もあります」 | ・参加者の参加の有無の把握<br>・新規の参加者とのコミュニケーション<br>・事前アンケートを十分に活かすことができなかった。 | ・スタッフ及び参加者の立ち位置や役割を明確にする。<br>・サイコロの活用，ニーズを聞きだす方法の検討 |

活動を行う中で明らかになった他の課題点を2点挙げる．1点目は参加者が事前に把握できず，スムーズなグループ分けが難しかったことである．2点目に，新規の学生参加者は増加したが，参加の目的が明確でなかったためコミュニケーションが受け身になりがちであったことである．そもそもの活動の目的，ファシリテーター及び参加者の役割を繰り返し伝えていく必要性があった．

## 2. コミュニティスペースの試行期 #8 ～ #11（X 年 11 月～ 12 月）

### (1) 障害のある人の参加

試行期における参加者を Table 4 に示した．新たな参加者については，見学に留まり継続的な参加にはつながらなかったため，表からは除外している．

Table 4　熊とフレンズの参加者と参加状況

| 参加者 | 年齢 | 障害の程度 | 参加状況 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | #8 | #9 | #10 | #11 |
| A | 58 | 肢体不自由 | × | ○ | × | × |
| B | 27 | 知的障害（中度），肢体不自由 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| C | 22 | ADHD | ○ | ○ | ○ | ○ |
| D | 27 | 肢体不自由 | × | × | × | ○ |
| E | 19 | 自閉スペクトラム症 | ○ | ○ | ○ | × |

### (2) 試行期における活動内容・話題，満足度

活動内容・話題と満足度を Table 5 に整理した．

主な活動内容について，#8 の「B: 挨拶の仕方について」，#9 のサイコロトーク，#10 の学習講座がある．

Table 5　各回の活動内容・話題，満足度

| | 活動内容・話題 | 満足度（「とても」「少し」） |
|---|---|---|
| #8<br>11月6日<br>回収率 50% | 「悩み相談」B：挨拶の仕方について<br>「雑談」ストレス解消法，楽しいときについて | 居心地が良い 50%<br>また来たい 50%<br>悩みが解決した 50% |
| #9<br>11月20日<br>回収率<br>50% | 「雑談」最近のことについて，サイコロトーク<br>「雑談」買い物の話<br>「その他」大学構内の散策 | 居心地が良い 100%<br>また来たい 100%<br>悩みが解決した 50% |
| #10<br>12月4日<br>回収率0% | 「学習」賢い買い物について考える<br>「学習」人間関係について考える | 回答なし |
| #11<br>12月18日 | 「雑談」最近のことについて | 未実施<br>（短時間の参加だったため） |

#8 では，状況や関係性に合わせた挨拶の仕方，挨拶が返ってこなかったときの対応等について，ファシリテーター及び参加者で一緒に考える様子が見られた．その最中，会話の中で出た意見やアドバイス等をメモに取りたいと B が希望し記録する様子が見られ，活動が実践的な学びの場として機能していると感じられた．

#9 のサイコロトークは，活動の中で，話す話題について参加者の希望が無い場合や，話がまとまり時間が余ったとき，雑談をしたいときの話題提供に使用した．

活動では，サイコロを転がして上の面に出たテーマについてグループで話した．サイコロは，違うテーマが書かれたものを 4 つ用意し，参加者に合わせて使用した．この目的としては，参加者の自主性を引き出すこと，無理なく話せる話題を選ぶことで話の苦手意識を少なくすることの 2 点である．

テーマは，年齢や性別に関わらないもの，皆が話せそうなものを考えた．以下に一部を挙げる．

・最近テンションがあがったこと
・大事にしている私だけの宝物
・好きなテレビ番組
・私が最近頑張っていること
・行ってみたい場所
・もし 1 億円当たったら
・好きな映画
・私が今一番欲しいもの
・飼ってみたいペット
・これがないと生きていけないもの

#10 の学習講座は，これまでの活動の中で見えてきた，参加者にとって必要な事柄を，みんなで一緒に考えながら学ぶことを目的として行った．#10 では，「賢い買い物をしよう」と「職場やバイト先での人間関係について考えよう」の 2 つの部屋に分かれ，ファシリテーターが中心となり進めた．取り組みの内容について説明する．

**1）賢い買い物をしよう**

買い物において，目先の商品のみで決めるのではなく，幅広い視野で，より自分に合った商品を探せるようになることを目的とした．比較することや，様々な買い方の選択肢があることを学ぶ．具体的には，参加者 1 人の欲しいものについて，求める条件に合致するものを，参加者全員でインターネットから検索して探す．そして，探した商品を発表し合い，それぞれを比べる．同じ条件を聞いて選んでいても，人によって選ぶ商品や探す場所，中古品か否かが変わり，値段も違ってくることを知り，その理由を話し合い考える．ここでは，それぞれの商品について，「どうして安いのか」「どうして高いのか」「高くても相当の価値があるか」といったことに焦点を当て考えることで，実生活への応用を期待した．

**2）職場やバイト先での人間関係について考える**

一見，短所のように見える相手の性格や特性を，見方を変え長所として捉えることで，相手のそれまで見えなかった良さに気付くことができるようになることを目的とした．社会生活を送る上では，様々な人とコミュニケーションをとり，連携・協力することが欠かせない．しかし時には，性格が合わなかったり，嫌な部分が大きく見えたりし，良好な人間関係を維持することができないことがある．ここで，現実の認知の仕方を変えることを意味するリフレーミングを活用し，相手の良さを意図的に見つけることを学習する．活動では，2 人 1 組になり，お互いの短所を長所に置き換える練習を行った．

### (3) 試行期における要望，課題，検討事項

要望，課題，検討事項をまとめたものを Table 6 に

Table 6　試行期における要望，課題，検討事項

| | 要望 | 課題 | 検討事項 |
|---|---|---|---|
| ＃8<br>11 月 6 日 | B「もっと話したいなと思いました」<br>C「〇〇さんともっとお話したいと思いました」 | ・参加予定者が全員揃うまで時間がかかり，開始時間が遅れてしまった。 | ・開始時間を定める等のルールづくりをする。 |
| ＃9<br>11 月 20 日 | B「〇〇（参加者）の言葉を少しでもわかってくれたらいいなと思いました」<br>B「休憩時間は 2 回でいいと思いました」 | ・聴く姿勢が十分でない。<br>・活動以外の待機時間が長かった。 | ・経験を重ね，受容や共感の力を身に付ける。<br>・連携をとり，共通理解を図る。<br>・進行を円滑に行い，活動時間を充実させる。 |
| ＃10<br>12 月 4 日 | なし | ・学習等をテーマにして実施する場合，ファシリテーターの負担が大きくなる。 | ・一部のスタッフの負担が重くならないよう，チームを組み役割を分担するなど連携をとる。 |
| ＃10<br>12 月 17 日 | なし | ・新たな参加者の拡大 | ・遠隔に加え，対面での活動を行う。<br>・ルールづくり等を行い活動の基盤を整える。 |

示した．#8 では，「もっと話したい」といった要望があった．活動の現状として，参加予定者が揃うまでの待機時間が長くなってしまうことがある．この課題に対し，開始時間のルールづくりを行い，活動時間を長くとれるようにすることを検討した．#9 では，スタッフの聴く姿勢が十分でないことが課題として浮き上がった．経験を重ね，受容や共感の力を身に付けていくこと，スタッフ同士のコミュニケーションを通し，参加者とのより良い関わり方や配慮事項等の共通理解を図る機会をつくることを検討した．#10 では，ファシリテーターにかかる負担の大きさついて課題があると考え，チームを組む等連携して取り組むといった検討を行った．

**(4) 試行期における考察**

試行期では，創設期に行った取り組みを引継ぎながら，新しい取り組みをいくつか取り入れた．

サイコロを活用した話題の提供に関しては，同じ話題に対して話をするため，話の流れが掴みやすく，安心して話に参加できるといった良さがあると感じた．また，参加者 1 人ずつに話をする機会が確保されるため，話に入ることが苦手な人でも落ち着いて話すことができ，グループ内の発言回数のバランスが良くなった．サイコロに書く話題については，1 つ，希望に応じてそれ以上，始めに募り，オリジナルのサイコロを作成することで，参加者の自主的な参加・満足感の向上につながるのではないかと考える．実施する際の配慮事項として，話をすることが難しい場合は「パス」を可能にする，新しいテーマを用意するといったことをルール化することで，居心地の良い場にすることができると考える．

学習講座については，参加者の実態や状況に応じて企画し実施することで，困り感の解消や豊かに自分らしく生活することの手助けになると考える．今回は，参加者からの要望でなく，運営側が企画したものであるが，今後は参加者の学習ニーズも取り入れながら実施したいと考える．これらの学習講座を実施する上では，活動の流れが分かりやすいこと，1 度きりでなく必要に応じて繰り返し行うこと，参加者及びスタッフの反応を見ながら進度や内容を調節することといった配慮事項が大切になると考える．

試行期においては，創設期と同様に，参加者の拡大についての課題が残った．#8 では，新規の参加があったが，継続的な参加にはつながらなかった．その原因として，新たなコミュニティーに参加してすぐに安心して交流できるような人間関係を築くことが難しいといったことが考えられる．また中には，少人数のコミュニティーであると可能だが，大人数となると緊張する人もいると推測する．そのため，今後の展開の中で，安心できる環境づくりについて改善を行っていく必要があると考える．

## 3. 参加者・スタッフへのアンケート調査

**(1) アンケート調査の概要**

全 11 回の活動を終えて，参加者とスタッフへアンケート調査を行った．目的は，参加者にとって活動がどのような意義を持つ場となっていたか，今後どのような期待をしているかについて明らかにすること，また，ファシリテーターや運営側が感じる成果と課題を明らかにすることである．それぞれ，3 名の障害がある参加者，6 名のファシリテーターから回答を得た（Table 7，8）．

**(2) アンケート調査に関する考察**

**1) 参加者（障害がある人）へのアンケート調査結果**

回答が得られた 3 名中，活動に参加することで生活に変化があった人が 1 名，少し変化があった人が 2 名と，3 名ともに変化があることが分かった．どのように変わったかをみると，①「話を聞いてもらえたことで，自分の体験を振り返って整理でき，少しずつ前向きに行動できるようになりました」と活動が自分を見つめ直し，前向きに行動する一助となった人，また，②「新たな出会い」と活動が新しい人間関係を築く場となった人がいた．さらに，③「これを糧に頑張ろうという励みになった」と活動が日々の生活を充実させるための一要素となった人がいた．このように，参加者の生活に何かしら良い方向に影響したことを知ることができた．また，①からは，普段誰かに話をじっくり聞いてもらう場や機会が少なかったということが推測される．この活動を通して，自分の話をする・人の話を聞く場が身近にでき，生涯学習の場の 1 つとして定着していくのではないかと考えられる．

Table 7　参加者へのアンケート調査

| |
|---|
| 質問１　活動に参加されて，生活に変化はありましたか。 |
| 〈変化があった〉33.3%　〈少し変化があった〉66.7%　〈変化がなかった〉 0% |
| 質問２　どのように変わったのか教えてください。 |
| ・皆さんに会える楽しみができました。 先生方や皆さんに話を聞いてもらえたことで，自分の体験を振り返って整理でき，少しずつ前向きに行動できるようになってきました。(①) |
| ・新たな出会い。いつか熊本に行きたい気持ちが芽生えました。(②) |
| ・これを糧に頑張ろうという励みになった。(③) |
| 質問３　今後，この活動にはどのような期待をしていますか。 |
| ・年齢や立場の違ういろいろな人に会いたいです。(④) |
| ・ひとりひとりと話をしたい。 僕はリモートは最近までした事ないから慣れていないので，目も見え辛いので。 短時間の参加になりますが，行ける日は参加させて頂きます。(⑤) |
| ・雑談などをして親睦深めたい。(⑥) |

Table 8　スタッフへのアンケート調査

| |
|---|
| **質問1　「熊とフレンズ」は，どのような場にできたと感じましたか。** |
| ・いろんな人と知り合って話ができる場だと思いました。普段は同じ人としか話さないし，ゼミや活動に参加してもいつも同じ人と話していますが，熊とフレンズではいろんな人と話すことができました。(⑦) |
| ・活動が Zoom だったことで他県の方とも交流でき，とても貴重な交流の場になったのではないかと思います。熊大の校内を散策した回もありましたが，いろんな交流の仕方があると感じました。今後，コロナが落ち着いてくると対面で活動を行えるようになると思いますが，対面で行えるようになると地元の方達との新しい輪が広がったり，対面でしかできないような活動も行えるようになるのではないかと思います。(⑧) |
| ・土曜の午後を明るく華やかに (⑨) |
| ・障害の有無関係なく，たくさんの人と交流できる場になった。(⑩) |
| ・新しく人脈を作ることができる場，様々な立場・環境の方から話を聞ける場，相談できる場であったと感じました。(⑪) |
| ・会話を楽しめる場，悩みを共有できる場，コミュニケーションスキル向上の場。(⑫) |
| **質問2　今後この活動を展開していく中で，どのようなことが課題だと感じましたか。** |
| ・ファシリテーター以外の学生の役割，新しい参加者がなかなか来ないこと。(⑬) |
| ・グループに分かれた時にファシリテーターが必要になると思いますが，ファシリテーターの役割はとても大きいように思います。活動が始まってしまったら時間を設けることは難しいと思いますが，ファシリテーターの研修会も行うことができたらと思います。また，参加人数が多くなることで集団が苦手で参加できなくなってしまったり，相談したくても相談できない雰囲気になってしまわないような配慮も必要になると思います。(⑭) |
| ・重度で会話するのが困難な人を，いかに会話に入れるかが課題。(⑮) |
| ・ファシリテーターが場をうまく回すことと，テーマ設定によって場が盛り上がらない場合がある。また，人によって話す分量も変わるので，全員に満遍なく話してもらうための調節が難しいと思う。(⑯) |
| ・他の方から話を引き出すのが難しかったです。ファシリテーターだけがたくさん話すようにしたくなかったのですが，話をつなげたり広げたりすることをうまくできないことがあったと感じます。(⑰) |
| ・当事者への周知・広報（目に止まりやすいようにすること）(⑱) |

そして，今後の活動に期待することに関しては，④「年齢や立場の違ういろいろな人に会いたい」と，さらに幅広く人間関係を広げ，色々な考えや価値観に触れたいといった意見や，⑤「ひとりひとりと話をしたい」と，少人数での交流を基本とする現在の形に囚われず，1対1での交流をしたいといった意見もあった．④について，現在，活動を運営しているのは，大学の学生が多いため，年齢層は限定的になっている現状がある．活動の目的に照らし合わせてみても，多様な人間関係の中で交流することに意味があるため，今後外部から学生以外の参加者をいかに活動に呼び込むのかが重要であると考える．⑤について，現在はZoomのホストが参加者及びファシリテーターの割り振りを行っており，個々に自分の判断で移動することにはハードルがあるようである．参加者がブレイクアウトルームの移動や個別相談の希望など，意思表出しやすい雰囲気づくりが必要であると感じた．

**2）ファシリテーター（学生）へのアンケート調査結果**

活動がどのような場にできたと感じるか質問したところ，⑦「いろんな人と知り合って話ができる場」，⑩「障害の有無関係なく，たくさんの人と交流ができる場」，⑪「様々な立場・環境の方から話を聞ける場」等と障害の有無や立場，環境に関わらず，多様な人と交流ができる場にできたという意見が多くあった．加えて，交流を深める中で活動が，⑪「新しい人脈を作ることができる場」や，⑪「相談できる場」，⑫「コミュニケーションスキル向上の場」にできたという意見もあった．このように，雑談や最近の過ごし方，生活の中で気になったことなど，自由に話し合える場があったことで，家庭や職場以外での人の輪が広がり，身近な相談できる場，自ずとコミュニケーション能力を高められる場にできたのではないかという意見が挙がった．また，これらの意見をみると，ファシリテーター自身が多様な人との交流に意義を見出し，活動の運営・サポートといった目的だけでなく，参加できている実態がうかがえる．

一方で，活動の大きな目的である，交流の中での学びについて成果を感じたという意見は出なかった．これは，この活動の中での「学び」の認識が十分に共通理解できていなかったことが原因の1つだと考える．ここでの学びは，生涯学習としての学びであり，どのような形であっても成長したり，課題が解決したりした場合には学びがあったと考えることができる．話をする，聞く，相談するといった交流が「学び」に通じているということを再度共通認識することが必要であると感じた．この認識を高めることで，ファシリテーターとして深く聞き出す部分や，皆で一緒に考える事柄を見極めたり，ファシリテーター及び参加者として，今まで以上に寄り添いながら交流したりすることができるのではないかと考える．

**3）活動を展開していく上での課題**

活動を展開していく上での課題については，場の中心的な役割を担うファシリテーターに関する課題や，障害のある参加者への配慮についての意見が出た．

ファシリテーターに関して，⑭「ファシリテーターの役割はとても大きい」，⑯「場をうまく回すことと，テーマ設定によって場が盛り上がらない場合がある」，⑯「全員に満遍なく話してもらうための調節が難しい」，⑰「話を引き出すのが難しい」といった役割の難しさに関する意見が多く挙がった．この活動の中で，

ファシリテーターは, 参加者が安心して話せるように, 発言に対して分かりやすい反応をしたり，参加者の発言回数のバランスを考えて話を振ったり，また，情報を補足して皆が分かるようにしたりしながらグループの雰囲気をつくるといった役割があると考えている. この役割は，多様な人が交流をする上では不可欠な存在であるが，共通点や共通の話題を探すこと，発言を促すタイミングや回数等，それぞれのスタッフが難しさを感じていることが明らかとなった．参加しているメンバーや状況によってファシリテートの在り方も変わるため，経験を積み重ねる中で，力をつけていくことが大切であると考える．研修会を行い，皆で連携して技術を高めていくことも今後検討していく.

障害のある参加者への配慮については，⑮「重度で会話するのが困難な人を，いかに会話に入れるかが課題」，⑭「参加人数が多くなることで集団が苦手で参加できなくなってしまったり，相談したくても相談できない雰囲気になってしまわないような配慮も必要」といった意見が出た．会話に困難がある参加者がいる場合，話すのに十分な時間を確保することが必要である．そのため，グループでの会話においては，状況を見て発言を求める，時間をとるといったファシリテーターの役割が重要になってくる．その他の参加者においても，通常以上にゆっくり話す，話が分かりやすいように補足などをするといった意識をすることが大切であり，そのような雰囲気づくりが運営側には求められていると考える．また，集団が苦手な方への配慮について，Zoom による遠隔での活動になると，画面上に参加者の顔が並ぶこととなる．そのため，集団が苦手な人以外にも，初めて参加される人は，見知らない人ばかりで戸惑うことが考えられる．そういった場合には，見知った間柄の人と一緒に参加することを推奨すること，短時間の参加を可能にして徐々に慣れるようにしていくこと，対面での参加で安心感を得られるようにすることといった配慮を行う必要があると考える．また，参加している際に表情や反応の仕方にも注意をし，居心地の良い雰囲気，気兼ねなく話せる雰囲気を全体でつくることが大切であると考えられる.

## Ⅳ．本研究のまとめと今後の課題

本研究では, 障害のある人の生涯学習の一環として, 共に学び・交流する場をつくる実践を行った．この実践から，コミュニティスペースの基礎作り及び活動を発展・継続させるための配慮事項の明確化を図ることができた. 中でも, この活動におけるファシリテーターとしての役割の重要性や，障害の特性に応じた配慮の在り方，参加者全体で共通認識すべき事柄のルール化の必要性について明らかにすることができたことは成果であった.

参加者の感想からは，参加することで前向きに行動できるようになった人，日常生活を頑張るための励みになった人がいることから，活動が少なからず本人の「成長」や「課題の解消」に結びつき，生活の質に影響することができたのではないかと受けとめている. 仕事上の悩みや生活する上での困り事に関しては，本人からの相談だけでなく，最近の出来事などの雑談の中で，表現されることもあった．このように，本人が困り事や課題として捉えていなくても，客観視すると後に課題となる可能性がある事柄などが見えてくることがある. そのような瞬間を見逃さず, 参加者及びファシリテーターが寄り添い，向き合い方や対処法を一緒に考えることができた点がこの活動の大きな意義であったと考える.

今後の課題として，次の 2 点が挙げられる．1 つめに，運営側の役割分担に関して偏りや負担感が出やすい点がある．ファシリテーターなど一部の人が中心となるのではなく, 全員で活動に関する共通理解を図り, 連携して場をつくるといった意識が必要であると考える．そのために，研修会など定期的な話し合いの場, ファシリテート能力を高める場をもち，運営側の一体感を高めていく必要がある．2 つめは，障害の特性に配慮した交流には改善の余地が多くある点がある．受容・共感しながら聴く姿勢や，表情や会話の内容等を含めた話しやすい雰囲気づくりができるよう，配慮の在り方について意見を出し合う場を設け，共通認識できるようにしていきたい.

以上を踏まえつつ，今後，活動を展開していくにあたり，以下のことを行っていく.

1 点目は，活動を展開していく上でも必要不可欠となるルールづくり，ファシリテーターの留意事項マニュアルづくりを行う. ルールは, 参加する全員にとって心地の良い活動になるよう，皆で確認して活動を進める．現時点で考案している項目を Table 9 に示す. 他にもルール化が必要な項目，具体例等があれば，その都度加えていく.

最後に，障害の有無に関わらず，多様な年齢，立場の人が参加することが学びを生み，ひいては共生社会の実現においても重要であると考えるため，幅広く参加者を募っていきたいと考えている.

## Ⅴ．引用文献

井口啓太郎（2020）「障害者の生涯学習」政策と公民館の課題，日本公民館学会年報，17 巻，92-97

栗林睦美・野﨑美保・和田充紀（2018）特別支援学校卒

Table 9　運営する側の配慮事項マニュアル

| | | |
|---|---|---|
| ホスト | | ・参加者の特性に合わせてスタッフを配置する |
| | | ・最後に感想を全体で共有する |
| 共通理解 | 話すとき | ・ゆっくり皆がついてきているか確認しながら話す |
| | 聞くとき | ・頷く，相槌を打つ，必要に応じて質問する等，受容的・共感的な表情や反応を心掛ける |
| | 雰囲気づくり | ・安心感のある居心地の良い雰囲気，気兼ねなく話せる雰囲気 |
| ファシリテーター | | ・発言に対して分かりやすい反応をする |
| | | ・発言者の発言回数のバランスを考えて話を振る |
| | | ・質問を含め，情報を補足して皆が分かるような話にする |
| 会話に困難がある人への対応 | ファシリテーター | ・十分な時間を確保する |
| | | ・状況を見て話を振る |
| | 共通理解 | ・グループは少人数を基本とする |
| | | ・話が分かりやすいように配慮する |
| | | ・通常以上にゆっくり話す |
| 取組み | サイコロトーク | ・サイコロを２つ使用し，お題を選択できるようにする |
| | | ・話題は参加者と共に考える |
| | | ・難しい場合は「パス」を可能にする・新しいお題を用意する |
| | 学習講座 | ・活動の流れを分かりやすくする |
| | | ・1 度きりでなく , 必要に応じて繰り返し行う |
| | | ・参加者及びスタッフの反応を見ながら進度や内容を調節する |
| その他（前提） | | ・個人の性格や障害特性を十分に理解し配慮する |

業後における知的障害者の就労・生活・余暇に関する現状と課題：保護者を対象とした質問紙調査から，富山大学人間発達科学部紀要，12 巻 2 号，135-149

文部科学省（2017）開かれた大学づくりに関する調査研究

文部科学省（2018a）障害者本人等への学校卒業後の学習活動に関するアンケート調査，学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議

文部科学省（2018b）地方公共団体へのアンケート調査

文部科学省（2019）障害者の生涯学習の推進方策について－誰もが，障害の有無にかかわらず共に学び，生きる共生社会を目指して－（報告），学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議

文部科学省（2019）令和元年度学校基本調査

## Ⅵ．付記

本研究を実施するに当たり，ご理解・ご参加・ご協力をいただいた参加者の皆様，ファシリテーターとして活動をサポートしてくださった学生の皆様に心から感謝申し上げます．